

887

# 大觀

本多庸一序  
平岡希久著

東京 警醒社書店

013708-000-8

特28-346

大觀

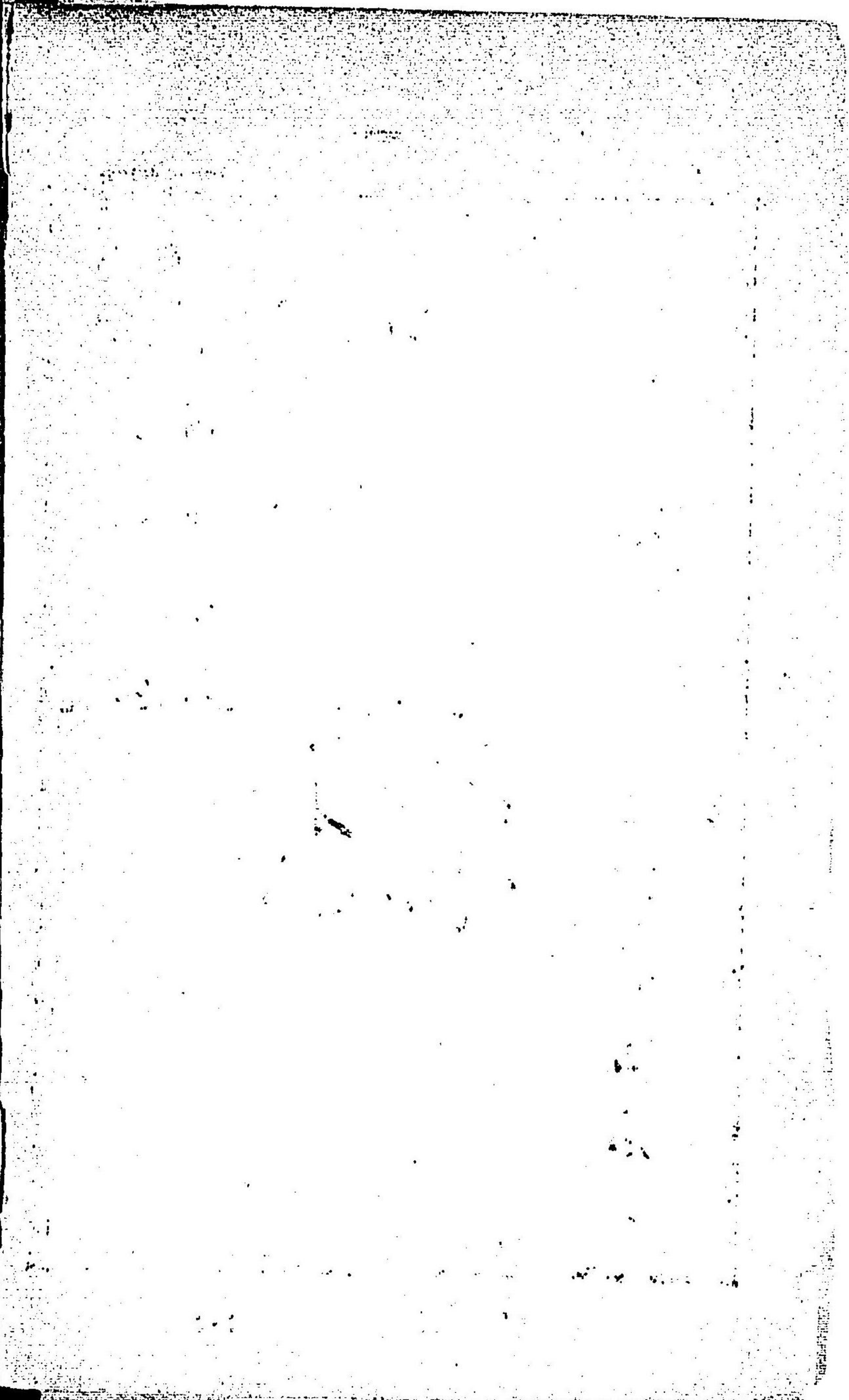
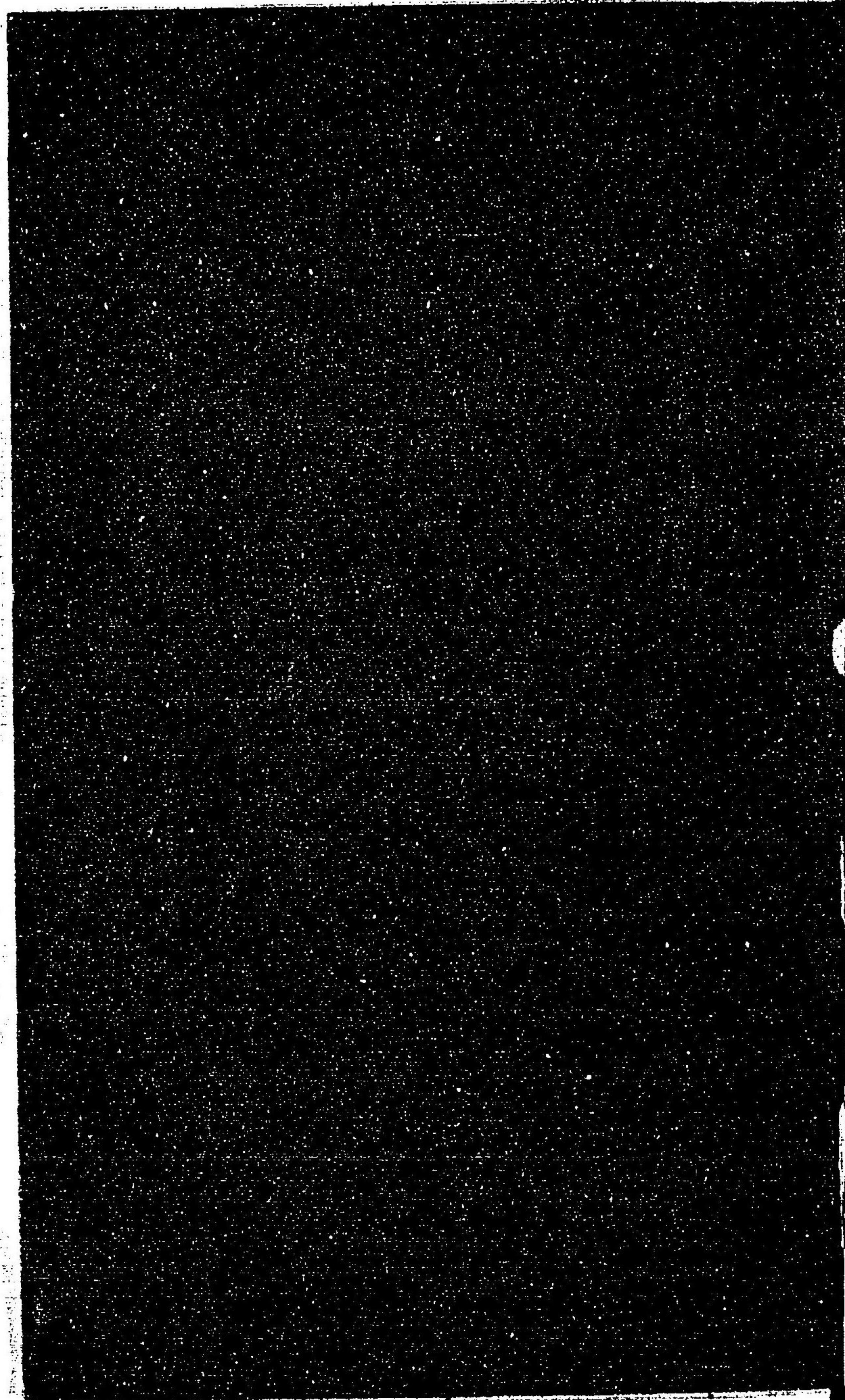
平岡 希久/著

M25

ABA-0180









大觀の序

世に賈貨多くて屢人の損失を致すこと

未だ曾て貨幣と惡まむ世に宗教多くて眞

るの亦多し然れども眞人の性と養ひ其安心永生

と與ふるもの必だ其中に在りて陰然人間の道を維

持するものあり然ると人遂ひふ之を顧みむ彼の貨

幣を重むるもの其だ異なるものあるは果して何故ぞや

是唯人の必要を感じざるのみ夫れ人にして

宗教の必要と感ぜざる間は百日の説法を聞き千卷

の書を讀むとも宗教の益を受けんことは猶ほ黄河





の清からんことを望むごとく傳教の業たる説くこと  
との難さふあらざして聽かんと欲する情念を鼓動  
するの難さふあるなり而して世に宗教の必要を説  
くの書をなすふあらざれ共大概難解の文字ふいて一  
般普通の需用に適するもの甚鮮く平岡希久氏之を  
憂ひて遂に一書を著し此欠を埋めんと欲す著既  
み成り叙を予に徴す敢て同感を表して巻端に記す

東京青山に於て

明治廿五年九月廿八日

本 多 庸 一

大觀自序

仰て天を觀れば茫茫として高く長く伏して地を相れば  
渺々として廣く久し星辰爰に宿して幾億歳を送り山川  
爰に休みて數万年を過す人生朝露夫れ茲に恨みからん  
耶 春の花野に笑みて我を慰め秋の月水に流れて我を  
樂ましむと雖ども觀花弄月我漸く老ゆ豈長く娛樂を花  
間月下に取るべけんや 人生短あしと雖ども天職海よ  
りも大義務山より重し生きて螻蟻と日月を送迎するハ  
心の恥づる處草木僅々一歳の生存に過ぎざれども花開  
き實結び以て其の天職を完ふす秋風何ぞ彼に於て恨み  
あらん耶吾人悠々花に酔ひ月を迷ふて春日の短きを啣



たば煙霞漸く眼邊に棚引き暮景沈々として東より來る  
あらん宿昔青雲の志越に蹉跎たるを追悔するとも豈よ  
十日の菊からざらんや名を揚げ功を誇るハ吾が望む  
處よあらざ富貴榮達又た吾が願ふあらざ吾が朝夕を祈  
願して心を勞するものハ英雄の如く名士の如く天下よ  
雷鳴するの大名にあらざ實よ草の如く木の如く盡すべ  
き我が本分を完ふし終らん事かり我ハ人として神よ負  
へる恵あり子として親よ負へる慈あり民として君よ負  
へる恩あり全胞として社會よ負へる愛あり良しや劣才  
此の大義よ報ざる能ハざるも点滴之れを盡すあらんと  
寸時も忘れざるあり 弱肉病を得て越年癒はざ私よ思

ふ露命ハ圖るべららざ一朝瞑目地縁絶たば我ハ無用の  
冗物空しく日本の粟を食み空しく天地の氣を吸ひ盡す  
處一毛よ足らざ負ふ處泰山よ餘りあり螻蟻草木我恥づ  
る多し故よ再思す吾が本懷を發表し我が愚想を章綴  
し以て全胞の全情を得るとあらば根無し草とハからざ  
して花咲き實る秋もあらんと之れ余の大觀を序ぶる  
原由かり我敢て雅文を求めて強て思想を形容せざ自  
然識得の性情よ任す又た殊更に深遠高妙の卓論を求め  
ば衆觀に供すべき容易の道よ從ふ高遠卓論世上數多あ  
らん取て以て愚考の足らざるを補ひ文体の如き卑近  
と専らとして力めたりと雖ども運筆慣性かく雜亂せる







大観

第壹編 宗教要論

個人篇

平岡希久編



〔一〕

向<sup>むか</sup>て出<sup>い</sup>來<sup>き</sup>得<sup>え</sup>る丈<sup>だけ</sup>け十分<sup>じふぶん</sup>詳<sup>しょう</sup>細<sup>さい</sup>ある説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>を致<sup>いた</sup>して、宗<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>の必<sup>ひつ</sup>要<sup>やう</sup>

重<sup>じゆう</sup>ぬる人<sup>ひと</sup>や、道<sup>みち</sup>違<sup>ちが</sup>ひの宗<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>を信<sup>しん</sup>じて冥<sup>めい</sup>福<sup>ふく</sup>を祈<sup>いの</sup>らるゝ人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>

故<sup>ゆゑ</sup>に不<sup>ふ</sup>必<sup>ひつ</sup>要<sup>やう</sup>と思<sup>おも</sup>ふ人<sup>ひと</sup>や、又<sup>また</sup>何<sup>なに</sup>も知<sup>し</sup>らずして日<sup>ひ</sup>を送<sup>おく</sup>り月<sup>つき</sup>を

有<sup>あ</sup>る程<sup>ほど</sup>日<sup>ひ</sup>を重<sup>じゆう</sup>ぬる程<sup>ほど</sup>、我<sup>われ</sup>が過<sup>あやま</sup>りし身<sup>み</sup>を回<sup>かへ</sup>り見<sup>み</sup>るに、付<sup>つ</sup>け、世<sup>よ</sup>の

上<sup>うへ</sup>に、世<sup>よ</sup>の會<sup>かい</sup>は、必<sup>ひつ</sup>要<sup>やう</sup>と信<sup>しん</sup>ずる事<sup>こと</sup>と、あ<sup>あ</sup>りま<sup>ま</sup>した、

第<sup>だい</sup>壹<sup>いつ</sup>編<sup>へん</sup> 宗<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>要<sup>やう</sup>論<sup>ろん</sup>

第<sup>だい</sup>一<sup>いつ</sup>章<sup>しやう</sup>

個人<sup>こじん</sup>篇<sup>へん</sup>

言<sup>げん</sup>



ある道理の勿論、宗教として吾々の信すべきもの何かと云ふとまで、御知せ申したく存じて筆を取りました、が、扱て又た茲に大困難を感ずるとなりました、何かと申せば宗教の必要を説くに、勢哲學の事も、科學の事も、神學の事も、説かねばなりません、斯く六ヶ敷説明するとの、素より薄識なる私に、御受合申し難きとですけれども、夫れに暫く宜いと、して見た處が、私の素志の、此の筆の跡、學者ばかりに見て貰ひたき考へでの、ムりません、世の中は有りとも有ゆる人々、學者も不學者も、男も女も、年寄も小供も、車夫さんも書生さんにも、若しも讀めるものあらば按摩さん、も、讀んでもらいたい積りですから、結局万人向きに書かねばならず、一人の機嫌さい取り兼ねる世の中は、万人の愛嬌者となるの、ちと強慾の話、分業でなければならん、専門

でなければならんとは、經濟學者の説ばかりでない、天地人間の眞理と見へるのよ、私一人一丸にて田の鳥、山の狐を討つのみか、都合宜ければ鳥に鱈、狐に芋を掘て貰たいとの望み、無理なる望みですが、然し、學者の分るか知らん自分達に、和漢蘭と捨て、貰ふも、本意でなく、之れでの容易過ぎて文盲の宜からんが、我輩等への讀む甲斐なしと、抛り出されるとも残念です、から如何のせんと筆とも相談を凝らし、ました、が、之れと申して妙計もありません、兎角今の世の、人の好嗜、得手勝手之れと謂ふ一定の文体もなければ、四書や五經を索しても、見へぬ熟字のあり餘るばかり、殊も宗教の論など云は、多くの理屈臭くなるの常なれば、哲人の畢生の卓論も、坐睡の材料と使はるゝ、よあらざれば、厨箱の下に呻吟するよ、過ぎざる習、去ればとて私の六ヶ敷事引並べ







は國防論あり、幕政奉還説出で、朝幕和解論も起りました  
 から万人の思想の右も左も一定せず、國內の議論の東西南  
 北幕府已に自ら迷ふ又た何人か定見あらんやです、明治政  
 府の大元勳とも謂われ創立の大業家とも呼ばれて功名赫  
 々として輝ける三條岩倉西郷大久保木戸大村大隈後藤の  
 人々でも始めより確然たる大經綸の胸の内にあらざると  
 明白よて明治政府を立て、君が代の讚美皇御國の唱歌を  
 聞くかど、の實は夢の間も思ひぬとでありましたよう、徳  
 川氏權を捨て、退き會津桑名軍敗れて事定まるの曉、左手  
 如何よせば宜しからんと、諸公の胸中も涌きし考です、恰  
 も暗夜よ暴雨を犯して怒濤を渡る舟人の心の單は彼岸よ  
 達する願ばかり、して漸くに漕ぎ着きし一島地身命今の助  
 かりたれど如何よして今より生活を立つべきやと思を凝

らすロビンソンクルソー然たる有様と思ひれます、今日  
 までは神洲勇武の民、觸れば馬も人も斬ると打ち誇りたる  
 甲斐もかく、一び觸れば岩を砕く鉄甲艦もかく、波を蹴て飛  
 ぶ火輪船もかく、震天動地一發都城塵も歸る大砲もかく、万  
 器万械彼に及ばざるのみか人俊と云ひ智識と云ひ到底外  
 國人よの及ばぬとの思想の涌々として起りたる時、岩倉大  
 使の歐米回覽とあり見るもの聞くもの愈彼優我劣の感を  
 起さざるのあかりしかの今、愈大改革をせねばあらぬと  
 云ふ議論の朝よも野にも、幾々として起りました、留學生の  
 合衆國よも英吉利よも獨逸よも佛蘭西にも、幾々送られま  
 した、外國人の合衆國よりも英吉利よりも佛蘭西よりも獨  
 逸よりも、幾々雇われましました、そして政治の改良の勿論、幣  
 局兵器局造船局造船局造鐵道局郵便電信局等も出て一方よの大學



を起し文藝工法理農等の高等智識を研究し中學專門校師範校も起りました此等智識の専修の幸も外國の物質的文明を捕虜する事が出来ました海に汽船も軍艦も浮ぶ様よあり陸よの電信も鉄道も通ずる様よあり洋館の巍然として雲表に立ち洋風の滔々として田舎にも吹きました僅々の中よ新天新地が出来ましたから文化文政天保の年寄の酒よ酔ふたが花の下南柯の夢と怪むばかりにありました實よ幸ある次第でいふりません乎去りながら何事も十全の六敷ものにて日本の文明も善根ばかりがありません日本國の饑へ渴く如く物質的の文明を羨み之れを捕へんと策りました之れを捕ふるとが出来ましたが精神力的の文明に甚だ冷淡でしただけに則ち文明の原素とあるべきものを求めたまへんせん

愛し都會の壯麗麗美あるを愛し其の市場の貨物物品の珍奇あるを羨み其の儘之れを己が郷里に移し都人士風よ自を化せんと計るもの、如く外装の夫れ容易に模倣すべきも其の精神を得るよ非ざれば到底都人よのされませぬ我邦人も歐米の優美を五官よよりて知りました、そして五官的に日本を米歐に化せんとしたの愚ある話でありませぬ然し之れは社會の常道と見へて草創の場合よの昔より斯る例數々あります支那よては秦の始皇と申す大王は六大國を亡ぼして一統の政を立つるときに六國の美よ目迷ひ外觀的の改良を第一としまして精神世界をバ暗黒と致しました又秦を滅して世を一手よ握りました漢の高祖と申す人中々の賢人でした、矢張外觀に心迷ひまして宮殿杯を飾りました我國にての名高き豊臣太閤







心と社會を治療する考でしよ手道徳の飾物とあり偽善の種となるばかりである倫理の説の果し世を救ふとが出來來ましよ實際の文力のなきも老老愚婦の用地は落ちて振ひません不必ず人の迷すの多ける人信も身持宜しからず教理は通せず人をして迷すの信じます、以上申しました通り日本人の宗教と對する思想の冷淡となり、無經驗となり、不必要となりて、宗教の價値のなくなり、第三段 宗教の眞義 去りながら之れ世人の宗教と云ふもの、本性眞義を知らぬからのとにて、只だ目の前と見ゆる佛教や神道などを見

て宗教と云ふ觀念を有たれたからです、元來日本にの佛教と神道ののみありしとですから、世人よの宗教と云へば此の二つの觀念こそあれ、純正的宗教と云ふ觀念のムります、私の經驗によるも宗教と言ひ、と、腦髓の直ぐ地獄極樂の景を寫し、劍の山、血の池の慘毒を示し、赤鬼青鬼肩摩して出で來り、手に手に鉄棒を揮ひ閻魔の應よ命を聽く様より、怠惰和尚が死人よ向て地獄にのやらぬ、極樂よやると引導する訛譯、或の情慾を曲ても果さんとの神參り、死期近て如來頼む老女の様まで、明白と思ひ出します、斯くすると馬鹿馬鹿敷なり、宗教の愚物と云ふ心の予の胸もも涌きま



先きの足とるらも迷れ歸柳ら  
 さ下尾を暗あすあ萊バらにん  
 もよ花止黒かり情ら樂深ぬ身と  
 我が探のめよてよぬ園さ水寄散  
 が偵陰左混詐引か彼よ嘆に寄散  
 繪顯よ手れりか岸充さ寫せれ  
 容の追安て隠れなてにすてる  
 のれひ心と遠と力と歡ち舟行落  
 廻月止と思くもき去れのくぎくつ  
 りのめ思くもき去れのくぎくつ  
 あ夕らふ野も越彼母と聲す寄月る  
 れよれとへ山の明あのか此て味無情の  
 顔手静あの中へ知すに申にきあ風の  
 らづる旅々川行り我が溺れんりす身の打  
 一、行の通へ正身の迷まきへ御身の流たれ  
 もく宿にさての跡正ふ見候へ身の何いく影  
 戦先捕へ木の國の匿か女よ遠望の如影を  
 慄さ捕へ木の國の匿か女よ遠望の如影を  
 遂もへ木の國の匿か女よ遠望の如影を  
 捕亦ら下の土さんざあくむなを  
 のく花暗よんざあくむなを

愛打り、懐寧し、人支力り、學抑も  
 子たて、帥反はて、た配で、まで、もや  
 よれ、慰吟覆溢る、し、す、せ、ハム、宗、愚  
 心、心、籍、せ、我、る、の、光、尚、ん、ム、教、物  
 愛、苦、し、る、を、天、を、は、人、り、と、と  
 ふ、し、望、の、教、愛、位、與、言、の、ま、申、ハ  
 る、み、ま、時、へ、を、を、ひ、葉、の、心、せ、す、笑  
 勿、惱、し、彼、怒、以、全、心、を、の、ん、の  
 れ、む、き、の、々、く、て、ふ、を、換、中、哲、の、れ  
 我、の、約、優、我、涯、す、照、て、に、學、ハ、何、す  
 が、時、束、麗、を、な、る、し、申、働、も、で、ま  
 導、彼、を、佳、導、き、慰、を、教、導、精、に、法、學、問、で、ハ、ム、り、ま、せ、ん、科  
 く、の、以、美、き、我、を、導、へ、心、の、て、精、神、も、さ、く、道、徳、で、も、ム  
 處、温、獎、勵、女、が、て、ま、心、を、元、氣、神、を、主、配、す、る、大、能  
 に、厚、篤、す、と、失、底、か、彼、の、し、心、を、彼、能、く、心、を  
 來、實、の、又、り、を、以、深、の、を、良、教、師、と、て  
 れ、汝、の、慈、母、と、我、が、悲、に、由、り、て、由、著、了、と、て







第四段 青年と宗教

何より御話し申さんか、御話し申すべきところの山ほどありますから、今の順序を考ふる時、もしも申しませぬ、就て、先づ青年と宗教の關係を第一着に御話し申すべし、世界の何の國を問はず、青年と申すもの、活氣強く、勇壯なるもの、よて、時で申さば、春の日です、東風一たび吹かば、花爛熳香郁と思へる、時です、實に頼母、數時代、愛らしく見ゆる望多く思へれます、去りか、此の春の時代こそ、實は人間の大切なるとき、よて、後、刈る果の皆、此の春に、蔭の、雲、ふも、詐、で、の、ありませぬ、蒼顔枯容、氣味悪る、佳、人、の、を、見、る、も、紅、顔、花、の、如、く、清、容、玉、の、如、き、榮、華、の、佳、人、の、も、皆、此、の、時、代、に、注、意、せ、ね、ば、な、ら、ぬ、と、存、じ、ま、す、

然るに愛らしき活潑々の青年の心中を探り見れば、實は奇妙なるもの、よて、面白き境遇、立つものであります、先づ青年の時代を中學時代よりとして、見て、五六年の其の間、最も物に感じ易き時として、小學時代に修め得たる智識と云ふにも、足らぬ、感覺的材料が、聊か、思想て、うものを引き起す、と、と、頻りに、想像の世界に、踏み込み、込みます、未だ、確とした考も、あ、ら、ぬ、と、か、れ、ば、空、想、空、思、が、身、を、圍、て、夢、ま、で、見、る、事、も、あ、り、ま、す、聊、か、私、の、經、験、を、陳、べ、て、御、笑、草、に、供、し、ま、し、よ、う、私、の、十、五、六、歳、の、時、分、甚、だ、歴、史、が、好、き、で、し、て、目、も、立、つ、もの、の、ナ、ボ、レ、オ、ン、シ、ー、サ、ー、ア、レ、キ、サ、ン、デ、ル、太、閤、鉄、木、眞、な、ど、で、した、其、人、々、の、事、業、が、浦、山、敷、く、て、あ、り、ま、せ、ん、私、の、私、を、鼓、舞、し、ま、し、た、精、神、一、到、何、事、か、成、ら、ざ、ら、ん、力、を、盡、し、て、進、む、べ、し、と、此、時、文、を、作、り、詩、を、習、ひ、自、ら、平、陸、海、の、号、を、稱、し、ま、し、た、大



言放語吟ヒます詩の生ての當に雄圖四海を蓋ふべし、死しての當に芳聲を千祀に傳ふべし、功名遠く群を出づるあるに非ずバ豈喚で眞の男兒となす足らんと申す句でした、又烏拉の山、大平の海、去て一周す、全地球一世の俊傑悉く臂を把り、万国の奇勝盡く降し、而る後駕を故山に飯し、瀟洒松菊を伴ひ、一世の能事庶幾く止みあんの句あど、愛讀せしもの、一でした、そして私の思ひました、内よ阿房の宮殿を造り、妃嬪三千前後、園み、海山の珍味目に餘るの間、富岳を前庭よ呼び、琵琶湖を後園よ寄せ、春の嵐山の櫻月瀬の梅を移し、夏の華嚴の瀧を洗水とし、秋の須磨明石の月を寄せ、冬の墨堤不忍の雪を招き、錦繡の床よ眠らんと、實は宏大無限の計策よ日を費しました、其の成る處の文などの活氣勃々、慷慨悲憤實に松林飯山も三舍を避くるばかり

です、然し十七年の夏よの少しく變化してイバミノンダスベロピダス、パトリックン亨利ー或の范蠡、張良、正成、の徒が愛らしくかりました、十八九年の頃のフランクリンやワット、ユランプス、ニユートン等が慕ひしくかりました、二十年の頃よりソクラテス、アリストートルカント、スペンカー等が師範となりました、そして經濟學や倫理學や心理學が面白くあり、思想の愈緻密よ傾きて、平陸海の号の黙々と變じ、又た希聲と變じました、實よ思へば青年の思想の雲の上よ、波の上よ、浮びて居ります、極樂の世界を見て進むと一般如何よして彼士の着すべきや、舟の用意も道案内もムリませぬ、南無阿彌陀佛の一念で渡らん、計るとの、實よ危嶮の、話で、ありませぬか、嗚呼、青年の時代程物に感じ易き時あり、見る物聞き物よ動され易く、三國史を讀んでの孔明とあ



り、八犬傳を見ての信乃とあり、佳人之奇遇を讀んでの東海  
 散史に擬す、平親王も此時に蹟たでしよう、青年の一跌する  
 の此時にあるのです、酒甘く香戀しく、色美しくあるも、此の  
 時でムリします、悲しむべきとで、あれど、三百万の青年中親  
 の悲みとあり、兄の慨とあり、身を捨るもの十中の七八、残念  
 あるとでのムリません乎、  
 惜むべし、多くの青年の己が活潑輕快なるに任せて一生の  
 大事を誤り、宗教などを棚の上へ上げて古臭し、馬鹿らしと  
 して心よ捨て、願みるものなし、去れど之れ皆南無阿彌陀  
 佛と唱ふると、アメンと唱ふるとを宗教と思ふからの誤  
 りです、アメンも南無阿彌陀佛も宗教でのムリません、斯  
 るを心無く百万遍繰返すとも何の功もムリません、宗  
 教の心の光、我等を照し導くものあれば、其の光を得ぬ限り

の何の功もなく、其の光よて照され守られ導かれて始めて  
 大功あるものとあります、青年の心も一度之れに照される  
 ば、心静に、氣修り、行高く、徳厚くあるとであります、嗚呼愛ら  
 しき青年よ、浮世の旅を仰ぎ見よ、天長く地久し、山の壘々と  
 して重り續き、海の渺々として空と接す、吾人が前途遙遠期  
 すべからず、寸前不案何の地に向て其の足を進め、安全よし  
 て渡り玉ふや、観音崎の燈臺も諸君の行路を定むるに足  
 りますまい、今より七八年の昔でしたか、思ひ立て伊豆の國  
 む旅したとがムリしました、豆州の私の知らぬ處不案内での  
 むりします、宿借る家もあるべしと存じまして、都を去り  
 し、四月の中葉、都の花の眞盛、涼車も通ふ御殿山の散り  
 櫻、色の品川の海に流れ、涼しき風の花の下より吹き送りま  
 した、急ぐ旅も非ざれば、鎌倉江の島に眼を樂しめ、藤澤原



桃の花姫小松を眺めつ、餘念もかく、大磯小磯打過ぎて、  
 鴨立深の過ぎたれど、西行の歌の心も思ひす、小田原より  
 の人車にて熱海路を蓋し掛る、右手の和根に連る山々、險し  
 く高く峙ちて、昔の白柏子でふりましたと言ひぬ、斗りの古  
 松生然り、左手の渺茫たる大洋、亞米利加を、昨夜出立しまし  
 たと云ふ文明風が吹き来る、江の島の目の前に、観音崎の指  
 の先に、嗚呼絶景と叫ぶ間、車は飛鳥に、忽ち深山幽谷、木  
 の下暗く、泉水音静ある處に走り、寒山寺の裏門まで通ふ  
 とかと思へば、忽ち身の磯に立ち、食み去らんとて迎ひ来る  
 怒濤：我曾て汝を犯せし罪なしと、杭解する間、車は山の  
 中腹よりあり、之れも一快、彼れも一愉、凡てのもの我は好から  
 ざる、あく、何も彼も打ち忘れたる旅の路、熱海に着し頃、日  
 早や沈みて、晚鴉栖、柳は飯る、離彼時：宿借らんとて、彼此防ひ

廻のれども、千客万來、室満つるを以て、断られ、如何もせま  
 じと思ふ中、電光劍の如く、忽然として霹靂天を破り、地を碎  
 き、颯と吹く一陣の風、暴雨を推して、盆を傾け、震天動地、獅吼  
 ぬ、狼號ぶ、心迷ひ、魂消へ、なんとすると、數回、僅に漣船に乗せ  
 られたれど、波怒り、風叫び、劍の山より上るやら、奈落の底に沈  
 むやら、目眩み、氣失せ、漸く夜の九時頃、細代村に着き、草の  
 屋に宿借りて、眠りよ就きしが、今日の樂皆失せ、行きて、枕に  
 響く波の聲、騒がされて、心の安きときもなく、夜を送りま  
 した、此時私の熟々、人間の生涯、思ひ及んで、今も忘るゝと  
 が出来ません、凡人の生涯、此旅の如く、若き内に、輕快、壯  
 遊氣、儘勝手、香も風も、我が爲めに、あるが如く、浮世に、心奪  
 れて、進み、行、行く、年波の、四十路も過ぎ、唯彼時、宿借り、心  
 ひ、尋ね、とも、先客、已、満ち、て、枕、す、る、處、なく、如何、の、せ、ん、と、思



案する時、已に遅く回すべからぬ悔の跡、心の亂れ、神迷ひ、安からぬ草の屋、よ前の事、共深く返す、跣たり、白髮の年、もあるべし、去れば、行先、知れぬ世界に、始めより、地理を問ひ、案内を取り、迷ひぬとを計るべきとであります、私の知る友人の内、血氣に任せて、深山に入り、道に迷ひ、食に盡き、寒に凍へて死ました、之れ實に輕くし、考て注意せぬからのとです、始めより注意して、道を明にし、食を蓄ひ、衣物を用意さへすれば、斯る誤り、ムり、ますまい、然し、衆多の青年の血氣、よ任せて、前後の考もなく、人の迷惑となり、世の笑物となり、名を殺し、身を亡ぼす、とであります、情に迷ふて、不義に陥り、遊女など、よ魂を托する人があります、實に、殘念でなりません、青年の人の子女なれば、子女の考を有つべきの當然なれども、子女との如何なる本分あるものにや、深く考へねばなり

ません、子女の本分の大切を覺るよは、自ら老人となりて、後悔を數へねば、ありません、又た、父母とありて、子女に對する、思考も、案じねば、なりません、若し、老人となりて、後悔の實の、あらざるべき乎、己れ、父母となりて、善き子供と呼べるべき乎、安心して居らるべき乎、随分、昨のり、あるまい乎、不孝の、あるまい乎、と、自ら、自らを、詮議し、自ら、父母となり、老人となりて、不満足なら、親の身に取りて、いさを、心配で、ふりましよう、が、不満足なら、親の身に取りて、いさを、心配で、ふりましよう、自分、が、親となりて、自分の、様子を、有た、如何であるか、と、實の、考ふ、べし、と、いふ、なり、後日、の、日本、の、則ち、今日の、青年、の、國家、の、柱石、となる、べき、人、後日、の、日本、の、則ち、今日の、青年、の、立、て、らる、べき、もので、ある、の、よ、世、をも、知らず、我、をも、忘、れ、只、だ、大言、放言、僕、若し、總理、大臣、とならば、など、山、鶴、目







命を反駁しました、之れ眞正の勇氣ではありません乎、其勇氣の實は歐米文明の源泉となりて流れは滔々止みません、又慈善の女王、オランダの女王、リッピンの如き、食人子の間に死傷を保護し、天女の名譽を博し、今の赤十字社の基となりました、又た彼のロンドン徒の如き、獨立自治の民として、其名高きではありません乎、其他吾人の印度亞弗利加及び南洋諸島の記事を讀む毎に驚くとはかりです、マルシヤルの如き、カモワの如き、ビリンピンの如き、食人國よ於て歐米人の宗教に由て人を化し、人を導きました、之れ等の實は眞正の勇氣と愛人の深き思想なくして出来ぬとです、私の思ひまするよ、日本の青年の俠氣は過ぎます、好奇心は過ぎます、空想は過ぎます、何卒實行實踐を専らとし、秩序ある進歩をなしたるものであります。

若き時よ老後の思案をなすとの決して卑屈でありません、若き人の標悍であれ、血氣であれと云ふ道理のありますまい、注意よ注意して、後の後まで考へるとの最も譽むべきとである、と存じます、又た身の終末を考へたとて老衰吳ひと云ふ道理もあり、ますまい、遅かれ早かれ死の万人は臨むとです、人間に到る處よ青山あり、骨を埋める豈墳墓の地なからんやとの私共の口吟する處なれども、之れに只だ肉體の捨て場所よて之れにて人間を終りしもので、のムりません、それよ人の天職も盡さず、運命も知らずとの憐むべきとで、のありませんか、死の老弱の隔なく食ふべきものを求めつ、つ漂ふ恐るべき狼です、若きとて頼みよのなりません、昨日の淵は今日の瀬と變り易き世の習性よて散る若櫻あり、既に看る松柏の摧けて薪となるを、現世までの知り得ら



る、も人の未來の一時も計られませぬ、振り回り見れば僅  
 十年の月日なるは祖父逝き祖母去り、予より年足らぬ從兄  
 弟も亡せました、全窓剝頸の友の我を捨て、去り、學友前後  
 五七、影なく師恩未だ報せざるは早世地は飯り、知己に別  
 る年に三五、何ぞ人生の定めなきや、思へば人の頼むべき處  
 は何でしよう、今此の筆を取る予の如きも又た何の時も地  
 下は行くべき期すべからざると思ひます、露の命の細き間を漸  
 く保ちつ、何とてか迎ひ來る死を思ひませぬ乎、死を思  
 ふの卑屈でしようか、私に思ひます、決して然らず、真正宗教の  
 教ゆる處の死の人は勇氣と獎勵を與へ、高潔の心を與へま  
 す、故に吾々の死を思ふて日々後悔の残らぬ様は計るべき  
 と、でありませぬ、いづれ來世論生命談の後章に詳説する考な  
 れば茲に略す、

第五段 學者と宗教  
 青年と宗教の一段議論中を片紙に盡されませぬ、然し彼は  
 説き茲に筆して泄さる考ですから、大觀中を前後讀み味  
 ひ玉はんとを願ふて今筆を學者と宗教の段に移しますが  
 此の論として茲に十分論するとの致しませぬ、二編三編に至  
 りて詳説する積りです、  
 世の學者とも云ひ、方の宗教を以て愚痴老耄を教ゆる  
 ものとし、自身にの必要のもの、如く思はれませぬが、之れ  
 が本當の考でありませぬ、學者と申したとて別天地の  
 ものよのあらず、全一なる人間です、只だ深く理を極め、博く  
 物を識り、高尚なる思想あると云ふは過ぎませぬ、同じく天  
 地の理法より由りて生活し、天地の理法より由りて支配され、一歩  
 も自然の法則を破ることができませぬ、矢張り人間と云ふ區







東の伊達、上杉、武田、北條の世となり、西の毛利、島津、山内、立花の世となり、中河、織田、徳川、前田の世となり、西の毛利、島津、山内、立花の世となり、中河、織田、徳川、前田の世となり、東の伊達、上杉、武田、北條の世となり、西の毛利、島津、山内、立花の世となり、中河、織田、徳川、前田の世となり、

ねばかりませぬ、日本の戦國は、一統の日本が無き筈となります、故に私の深く信じます、今日こそ學問世界の亂雑なれ、後より期する處に歸するものであるふと存じます、實に目を擧て見ます、地質學者の地球を貫通する道と、物理學者の戰國です、地球を占ひ、動植物學者の生物の轉々變化を唱ひ、考古人類學者の人間の太古を考へ、技術家の山を移し、海を填めんと計る、造物者も定めて人智の發達は驚くで



日の學問の一日一日より宗教の遠かる如く思ふものあれ  
 と却て之れ一日一日より宗教の近きものありと云ふも、今日日本  
 の横濱を東に向て出航する人は一日より日本を遠か  
 る如く思はれますが、合衆國を過ぎて英吉利に着し、蘇士を  
 過ぎ、印度に出で支那に出づれば、又元の日本に歸ります、絶  
 へず東に向て行く人が千里より二千里の日本を離れ五千  
 里より八千里の日本を遠しと思ふでしようが、實の近き  
 です、若しも今の學問を此旅行に譬たなら今の地中海邊に  
 あるのです、追々故國に近よります、私に信ず、地質學者の地  
 を穿ちて一大真理を認むべく、哲學者の人類を研究して遂  
 に一大真理に到達すべしと、  
 又た學者は宗教倫理學を退けて自分を自覺し、自ら身を治  
 るとが出来ると申じて居ります、が之れ餘り多く智識

を信じたからの誤りにて、實際智識を蔽ひれて眞の道を忘  
 れたのであります、手、恰も日本を東に去りたる人が  
 地中海に至り、之れより進めば進む程日本は遠かる、五千里  
 より八千里の遙かれば、又復るの後に行かねばならぬと  
 の議論をするものであります、寸前を知らぬ過去の  
 智識の此れより外に致し方なし、私に學者でなくとも  
 りません、が、學問すればするほど、研究すればするほど、人智  
 の淺薄と、人の才の無力と、人心の罪深く、自ら自らを御し難  
 實は極小動物たるを恥ぢ悟ります、之れは就ての大智エマ  
 ルソンのウエスレーもハミルトンもカントもマコーレー  
 も証言百を以て數ふる程申しましたのみならず、碩學ハック  
 スリーの人の愚劣なるを嘆きました、若しも世界の學者を  
 一堂の内に集めて討論會を開き、多數決と致しましたなら、



十分勝利の旗が宗教大必要に向て擧げられるでふりまし  
 よう、  
 夫れ人間の智識の何程の力かあらん、大天大地の秘密の愚  
 未だ一身の組織さへ知ると克のす、未だ一身の病さへ癒す  
 と克のす、未だ一身の行さへ正すと克のす、情慾の奴隷たる  
 の禽獸と一步十歩の差、天然自然の秘密に漏る、克のざる  
 の木石と一般、學者と不學者と相去るも五十歩百歩、素より  
 誇るべき處なきで、一里は餘るものあらず、之れを蟻穴に比し  
 造ればとて、未だ一里は餘るものあらず、之れを蟻穴に比し  
 て恥づるなきか、山を穿て鑛を取る之れ又蟻の地中より材  
 料を得るに比して劣れり、長橋あり、金銀あり、廉室ありとも  
 未だ蟻巢蜂窩に如かざるなり、人よ於て誇るべき處のもの  
 も、大天地より見るときは蟻と一般でしよう、諸君若し高丘

よ上りて下行く人を見られたならば、異常の感覺を人の上  
 よ起されるでふりまし、かばかりの人間でありながら  
 大知らず、小よ誇るこそ思はざるの甚だしきものであり  
 ませんか、天地は藏れある智識の測り知るべからざる處、人  
 の智識今日如何に發達したりとて、千万分の一よも達しま  
 すまい、彼の路の邊の草一本も人間の智識外でしよう、況ん  
 や魚鳥獸類より人間よ於ての、到底秘密を知ることができま  
 しようか、それで以て人間以上のものを批評するといふ大膽  
 よ過ぎたる話です、私の折々心理學の試験を致しましたか  
 鼻を閉ぢて口よ蒸種を入る、とも、其の香と味を知らぬ仁  
 肉を投すれば、生栗と思ふなり、又た七色を畫きし盤を急旋  
 すれば、色を失ひ、三指と四指を交重して間に物を置けば、一  
 物を二物と案じ、目を閉ぢて一回轉せしむれば、方位を辨せ



す、角度の異なる二点を一点と認め、其他觸官の誤認少からず、視官の如きの中々誤視し易し、昔より五官を正とすれば、道理も起るなれ、然し是非曲直の試験すればする程疑ひのしくなる、とす、若し諸君が望まらば、私心の心理の試験を以て諸君自ら自の愚を悟る迄で試みましよう、けれども今の更な大切なる論中ですから、斯まで不完全なる智識を以て天地の大理を通じたりと思ふの甚しき間違でのありましますまいか、ニュートンの地球に引力のあることを發明しました、が、何故に引力あるものが地球に存するや、地中点に如何なる元素あつて、引力を起すものか、分りましますまい、磁石の南北するの事實ですけれども、其の原因分りましますまい、人の引力と云ふ事實、磁石と云ふ事實に由て其上に學理を立つるまでです、此等現象世界の事實の古人は知られざ

るところのありまします、古人も此の自然法の上より立て、日を送りましました、若しも學者が智力より由て自覺して聖となれる佛よなることができるとし、ましても、之れも不完全の智識を標準とするので、すから、凡夫も、凡夫の智識より由て往生するところが出来まします、筈です、何故なれば、共に之れ五十歩百歩、完全と申す區域内を離れぬ故であります、今智愚を集めて、明日の有無を問ふか、又來年の天氣を問はん、誰も確答する人のありますまい、蓋し未來のこの一寸も人の知るべき限りでのあります、斯く詮じ來れば、人の誇るに足らぬもの極小動物と申さねばなりません、何とてか我を頼み我を誇る、この大なる、宗教の心の光、生命の生命、學不學の由らぬとす、

つまり學者の宗教の眞意を知らず、一つの學問と思ひ倫理



説と思ふから大なる間違を起すのでムリです、近時佛教の勢力の日は衰ふるを嘆き大研究を始め、中にも井上圓了氏の如きの最も卓出したる人ですが、氏の佛教を哲學組織よ解説しました、之れ佛教の本体なれば仕方もありませぬ、が、佛教も學問世界に落ちて、冷々たる空理多く結局眞如の實相の石佛死人に過ぎざる場合となりました、却て惜むべきとでのありません乎、此の段の論足らざれば、私の社會篇中よ補説する積りで、

第六段 富貴と宗教

此段を讀まる、人の必ず社會篇をも讀み、對照せられんとを希望致します、何故ならば、愛の富貴も宗教が必要である、と云ふ事ばかり説いて、富貴現在の有様や、未來の慾望の論じませんからです、

人間の金錢を崇拜するに至りましたの、何時頃よりの事ですか、太古に金錢の勢力の人間世界にありません、今日でも未だ野蠻なる南洋諸島か北洋氷島に参りますれば、金錢の價値がムリません、金錢一弗を與へて使役するより、煙草一本を與ふる方が喜ぶと申します、恰も三歳児の一圓より二圓より、菓子一つを喜ぶと一般でムリませしよ、しかし中古より金錢が追々勢力を加へ、羅馬法王が金錢よて赦罪券を賣るとか、足利義滿が金錢もて捕虜を救すとか、唐の朝の玄宗の金錢を献する人を上進せしめたとか申す事より、愈勢力加はりて、十九世紀の文明に至りまして、各國崇金の世となり、火災盜難除去の祈禱の勿論大神宮の御綏さへ金錢の多寡にて差ある場合となりました、金錢山を奪せば自然よ名と尊敬を受くるとなりました、



錢身よあれバ他人の節操を奪ふともできる、政事を左右す  
 るともできると云ふともありまして、地獄の沙汰を金もて  
 取り扱ふとができます、金が尊くなるよ従て、人が賤陋ある、  
 人が賤陋なるに從て、不義不徳が多くなり、道を求めます、人々の富貴は  
 尊い尊いから人々の取るべき道を求めます、人々の富貴は  
 さへなれば、安樂の來るであらう、人生の目的の達し得らる  
 であらう、之れより尊いものはないとして、金を拜みますか  
 ら、金の身にかりましたら、随分面目なきとて、ムりましよう、  
 造物主宰の人を奴隷とする爲めに金を造りしもので、ム  
 りますまい、菓子をやれば菓子ばかり尊がりて、呉れた父を  
 忘れる兎でつもない子供哉と思はる、でしよう、  
 富貴を望まぬ人もあります、富貴でさへあれバ宜い  
 と、思ふ人の何を望んで富貴を願ふでしよう、珍らしき味を

口よしたい、美しき衣を被たい、奇麗な家に住みたい、人よ崇  
 められたい、畢竟するに富貴なれば其の力で以て浮世の而  
 白くあき、味氣なき有様を推し拂ひ、安樂の日を送ることが出  
 來るのであろうと云ふ考で、ムりましよう、皆これ人の生涯の  
 味氣なく、浮世の空の波高く、花に風、月よ雲ある習なれば、心  
 に起す思案です、成程仰ぎ見れば、高樓大閣風に破れず雨よ  
 懼れず花鳥水月四時目を娛ましむべく、佳香珍味豈に口よ  
 恨みあらんや、快樂此よ宿り、幸福此よ臥して居るならんと  
 思ひ、れますが、人の物質的のもの、みはあらざれば、物質的  
 の裝飾のみにて、満足するところが出来ませぬ、餓たる人の思  
 ます願くは飽くとを得ん、飽くとだよ得ますならバ、死し  
 ても恨みなしと、去りながら飽くことを望む、生命を求むる  
 心なれば、飽て決して死ぬことを好みませぬ、年頃の嬢子が頻



りよ衣物を飾ります、明暮に美服を望みます、已に美服を得  
 ましてから、足の物、頭の物を望みます、足の物、頭の物が得ら  
 れますと先づ外容が出来ました、之れで満足するかと見れ  
 ば之れからの色が黒、体軀が肥太過ぎる、顔容の醜、身体が矮  
 少とか、自然物も不満足が起ります、そして最後の學問が少  
 い、智慧が足りない、心が愚たと云ふ、精神界の不足、不費めら  
 れます、斯くの如くしましても、自然物の自力によりて改む  
 るとが出来ませんから、終つて満足は得られぬこととなります、  
 此の如く人の慾望の一より二、二より三、追々加へります、  
 から致し方がありません、又た物質で以て人を満足すること  
 が出来ぬと云ふとも明でしよう、彼の酒も酔ふ人の何故に  
 酒に酔ふかと申せば、一、今日朝より暮に至るまで骨折り  
 疲れたる身と心を慰めて一時の安心を買ふと云ふもあり

一、の鬱晴しよ、皆之れ疲勞苦痛を免かれ、安樂世界に入るの  
 心です、けれども夜明け、悔とあり、恨みとなり、又た昨日全  
 様の苦痛が起りてまわります、富貴とて皆全理でムります、  
 富で安樂が来るかと思へば、高樓大團の内、幽懸棲み、盜賊  
 宿り、花鳥水月の間、蛇横り、鬼遊び、珍味の中、毒混じ、苦  
 味多、富め、富む程、苦痛と惱み、責め来ります、そして慾  
 望の處、女と一般、追々増し、加り、まして、物質の形容、世界を  
 離れて、自然世界、の運命、不足する、傷合となり、古臭き  
 とを申す様で、すが、秦の始皇と申す人の實に榮譽を極めた  
 人であります、外に、万里の長城を築て、暴敵を避け、内に  
 の阿房の宮を造りて、美女美味、飽き、道徳や倫理を説くも  
 のを生理にし、書籍を焼き、心を責むる種を亡ぼし、傲遊自尊  
 四方よ遊歴して、天地の景よ飽きました、が、不圖人生の夢の



如く、露と消ゆるを怨みまして、除福を蓬萊山に遣ひし、不死の仙薬を求めました、又た漢の武帝と申す人の國を傾け、家を傾くと申す程、華奢を極めた人でした、漢の天下四百年武帝の世の文學隆盛、商業擴張、邦土万里敵なく、四海波静よし、前後になき隆盛でした、武帝自らも學者でした、然し満足が出来ないで、臺を建て、仙人を招き、生命の薬を求めました、天下の物質が遂に富大王の身となりても、慰めを與へ満足せしむることが出来ませんから、大智者大富者天下の財寶を集めて眠り銀の價のソロモンに奪からざりしとまで云はれたる猶太の大王子ソロモンが晩年大悟して申さるるよ、吾れ人の爲すべき限りの富と榮と奢りと樂みと榮華を盡し、人の有すべき限りの智慧と力を得たり、世界廣しとも誰か吾が右よ富み榮む樂み豊なるものあらんや、去

裸と吾れ此等のもの、空しきとを知ら、裸にて生れたれば、命終時不隨者の觀念の最後よ來る人の觀念でムります、此等の事を思ひ廻りし、まして富貴が決して苦痛の雲なき樂園を携ひ來るもの、家にも風吹き雨降り花散り月欠く、照らすので、却て高く樓閣の風にも雨降り花散り月欠く、るもの、却て高く樓閣の風にも雨降り花散り月欠く、を覺られる、却て高く樓閣の風にも雨降り花散り月欠く、ま行く、船に乘て八千里一万里二万里も行かねば、ぬ之れを迂遠と思ふて直線よ地中よトンネルを以てテ、ムス河底を行く、瀛車の如く參らんと計りましても、三十日や四十日よ達するものでないのみならず、達すべき道理がムりません、迂遠の如き道が却て近くなるのです、寄るべき



道に寄らざれば、行けども行けども思ふ處は届くものでありませぬ、斯く申して、私の富貴を嫌ひ金銭を不必要と申すので、山りませぬ、斯る金銭の世の中となりまして、金銭なければ其日其日の日暮も出来ず、大業も成らず、修業も出来ませぬ、其日其日の日暮も出来ず、大業も成らず、修業も出来ませぬ、から、金銭の必要です、恒産なきもの、恒心なしと、實に貧困より不善に陥る者が数々あります、又私の常は概き居ります、若しも應分の學資がありましたら、今日斯る愚弱であるまい、彼を志してならず、此を願ふても達せざりし、皆之れ貧の私を止めたからの事でした、之れを思へば、貧程恨めしきもの、なく、富程羨ましきもの、山りませぬ、故に私に富を悪むるものではない、正當なる富正義なる散財の實に實に希望するものであります、然し私の富は由て榮華榮華

第七段 宗教原理  
第一節 依頼心

を盡し、安樂を求むると云ふ考の飽までも厭さねばなりませぬ、飽までも其の誤りたるを論じねばなりません、

人間は万物の靈長とも自稱する程ですから、一寸看ますれば、強剛無比の如く思ひますが、然るに視れば、極めて弱き柔きものであります、人間は他力に頼ればこそ、勇強となるか、単純なる人間で、實に憐なるものです、父母夫婦家族なるものあり、朋友、全類、社會なるものあり、治者、司法者、政府なるものあり、國家の衛護確立すればこそ、家も我も安きのです、獸を捕ふに銃槍の器械を頼み、魚を捕ふに網鏝の器械を頼み、寒よの衣、暑よの風、凡ての事、他力を頼まずして、今日の日暮が出来ませぬ、若しも他力の扶助なくば、人よ



り弱きものありますまい、其身よの鳥獸の如く寒暑に適する毛衣なく、爪弱ければ、果を裂き根を掘るともならず、齒牙弱ければ骨を噛み皮を剥ぐ力なく、翼なければ鳥の如く自由よ飛び廻るともならず、鱗なければ、魚の如く水中に游酒するともならず、道を知らねば遠きよ達せず、家よ頼まねば夜の眠穩おらず、加之おらず、人の世は行くよも止まるよも起るよも臥するにも、金錢なければ自由ならぬ、運命となりました、旅行する人の誰しも御承知で、ムりましよう、犬の如く走ると克ぬす、馬の如く負ふと克ぬす、日暮れかゝる、誰彼時世の中何處ともなく寂しさを増すの時、松陰暗き山路を獨りしよば、く通ふとき、懐を探れば宿の支拂覺束さく、遠くに狼の叫び高く響き、後よりの盜賊の來るかと思ひ、腰を探れば劍なく防禦の術の茲に盡き、烟管などを頼む

に至ります、杖でもあれば宜いものと人の吐き出す力なき、呉であります、英雄も豪傑も單身無器よて、物の役も立ちません、左れば人の誰彼に拘りならず、他力を頼む必要を感じるところです、衆寡敵せずとの戦史の取りも直さず、他力の大きなもの強いと、事でありませ、武田信玄の不動尊加藤清正の妙見、徳川家康の磨利支天、田村麻呂、義家の八幡、皆他力を頼みたるものです、チルソン、ウキリントン、グラント等の戦陣も祈願を凝せしも、他力を頼むのです、他力を頼むとの則ち人間の自然性にて、到底人間の獨立獨歩の單純生活の出来ぬを明かに知らしむるものです、此の人の他力を頼まねばおらんと云ふ事、古も今も變へるとおき、其分量も異ならぬと存じます、盲味野蠻人の日月山川、草木、金石、風雨等を強力あるものと信じ、神として之れよ依頼しまし



たこの今日物笑の種となるばかり消へ失せましたが、學開  
 け、理通し、昔時の迷愚を覺る今日の、昔日の愚神形を變へて  
 軍艦となり、鐵道となり、砲銃となり、金錢となり、電氣となり、  
 蒸氣となり、器械となりて人の依頼心を満足せしむる場合  
 となりました、故に私の思ふ、今日器械等を依頼する依頼心  
 の貫目と昔時日月等を依頼せし依頼心の貫目と、其分量に  
 の大差なきと信じます、然して今日の如く學術開け進みま  
 しても尙ほ古人と一轍、少しも進歩せぬもの、依頼心の最  
 大極点なる生命に關する條項です、何程醫術進歩したれば  
 とて無形の他力に依頼して身命を安する依頼心を去ると  
 の出來ません、元來天然固有の依頼心なるもの、起るべき  
 原因を探究するよ、外敵の患害より免かれて、身命の安然福  
 樂を企圖する精神です、而るよ如何よ技術が進歩し、工藝が

上達するとも、人の望む程の安然福樂を與ふる克のざるの  
 みならず、不安の地位に誘ふの恐懼社會上に頻出するもの  
 から、誰一人安きを心よ置くものがありません、私に信ず、物  
 質的の改良、物質的の進歩の到處人の大願を成就するよ、足  
 らざるを、故よ必ず精神的大能ありて、此依頼心を、  
 満足せねばなりません、之れ則ち精神力的宗教の是非人間に  
 欠くべからぬ所以であります、  
 第二節 慰藉心  
 人の美を愛すると申す情の固有の性質に存して居ります、  
 之れの人ばかりでなく、鳥よも獸にも美を愛する心があり  
 ます、美の則ち天地の中に自然備はる觀相よして審美哲  
 學の攻究基本とあり、美術の流行源泉となるのです、此の人  
 よ存する美を愛す、又美を好む心は何に由て存するかと申



せ、人の慰められたい、樂しませられたいとの願望あるから、す、そして此願望の反對、世の又人の樂しからざる不安の地位にあり、雲迷ひ霧深く、涙と露の世界あり、物の憂し人安からずと云ふ不快の觀念の深く、心中に積鬱しあるか  
 ら起るので、此や此の不平心を慰藉されんとの皆人の望む處にして、美の則ち之を慰藉するため、人よ求めらるものであり、書畫、骨董、盆栽、插花、茶湯より音楽、舞曲、小説、脚本、大弓、揚弓、球、突、吹矢、骨牌之れより以上、角力、芝居、落語、輕業、手品、理化、應用、諸藝、詩歌に至るまで、皆之れ慰藉を原因として、快樂を着色したるものあらざるのち、人の慰藉を望む心の大なる驚くばかりです、人間社會の事物半の之れ之れが爲め、存する如く、流行通貨の三分一は必ず之れが爲め、通用するで、ふりましよう、前に説きました人の依頼心

なども半の之れ慰藉を目的として起るものでしよう、彼寺院や會堂に沈坐、肅念、説教を聞く人と、居酒屋の店は放歌、亂酔する人の比、較、致し、ます、と、外形、大差あるも、内、心、全、一、で、す、石、山、寺、の、月、は、歌、ひ、逢、坂、の、庵、に、彈、す、る、人、と、言、原、の、花、よ、迷、ひ、歌、舞、妓、座、の、門、に、足、繁、き、人、と、外、形、異、な、れ、ど、も、内、心、無、差、別、で、す、其、希、望、の、異、り、ま、せ、ん、若、し、も、酒、よ、醉、ひ、花、に、迷、ふ、の、を、狂、人、と、し、ま、し、た、な、ら、ば、僧、に、近、き、月、に、歌、ふ、も、の、も、狂、人、で、す、北、條、高、時、を、狂、人、と、し、ま、し、た、な、ら、ば、西、行、法、師、も、狂、人、で、す、の、人、の、皆、慰、安、の、道、を、求、め、つ、か、ら、斯、る、誤、り、を、起、さ、し、め、た、事、で、し、よ、う、居、酒、屋、の、店、に、慰、安、あ、り、と、の、今、夜、の、思、夢、覺、め、て、見、れ、ば、苦、痛、と、悔、が、身、を、圍、で、居、り、ま、す、歌、舞、妓、座、や、吉、原、に、慰、安、の、道、が、あ、る、と、思、ふ、の、一、日、一、夜、東、天、日、を、孕、ん、で、夢、醒、む、る、と



です、然し人の慰められねばならぬ、動物とありましたから  
 慰手を要するの必然です、人の肉体的靈性的の動物なれば  
 慰藉も亦肉と靈との二面より求めねばなりません、假令肉  
 みの満足する程の慰手あるよせよ、靈も就て一の慰なくば  
 其慰の慰とならずして苦痛となるとです、又靈の慰をのみ  
 求めつゝ、肉も就て得る處なくば、偏竹林の七賢となりまし  
 よう、一の放蕩も流れ、一の虚無も失す、斯くして求むる處の  
 慰安の何れにも宿らざるとなります、今や物質界の肉樂  
 の慰安を與ふるも餘あります、去れど人の迷ふもの未だ  
 精神界の慰安も達せぬからであります、若しも精神界も好  
 慰手を得て更に物質界の慰も遇ひましたならば、世人の如  
 何ばかり、幸福でムりましよう、之れ則ち人の精神的宗教の  
 大慰手を求めねばならぬ故であります、いろは、にはへと、ち

りぬるを、わがよ、たれぞ、つねならむ、うわの、おくやま、けふこ  
 ねて、あさきゆめみし、ゑひもせず、此言未だ日本人を慰むる  
 よ足りません、厭世の狂人、西行を養ふよ足るばかりです、尙  
 吾人の眞正厚徳の宗教も慰められねばなりません、尙  
 第三節 安心世界  
 個人篇に就て論すべきところ尙ムります、私に安心  
 世界を説いて全篇の結局となし、漏るゝ處の社會篇や其後よ  
 至て説明する積りです、  
 迷ふにあらすや、須彌山の上はあるか昇るべからず、大海の  
 底にあらか、瀟島にあらざれば、至るべからず、武陵桃源誰か  
 再び足跡を遺せし、學者智者、智より測量したれども、却て浮  
 世の波を怒らす、富者富よりて、百方よ求めたれども、却て



浮雲に誘はれたり、一笑竹の漁父一杖の道者はあらざれば  
 安んずるに立つて、空に浮雲のなきためでありませす、花  
 月冴へて光澄み渡るの空に風雨のなきためでありませす、人  
 笑ひ色濃かなるの下に風雨のなきためでありませす、人  
 雨あるとき、花も天真の美を見ることができませせん、人  
 の心も此の如く、雲あり雨あり風ありて、心の曇り晴れざれ  
 ば、天真の美性が現はれませせん、其の天真の美性が曇りなし  
 に現はれて、饒なるとき、安心の世界が心の中に存するので  
 す、佛敎の煩惱即菩提、娑婆即淨土と説いた理の愛あるので  
 菩提も淨土も別世界にあるものならず、煩惱娑婆と全一處  
 にありませすなれども、只た煩惱世界となるも、淨土世界とな  
 るも、人の心の如何にあるとす、弘法大師の歌もかく、に  
 なはさと近くなりよけりあまりの山の奥を尋ねての句あ

り、即ち迷の中は悟あるの意でしよう、  
 安心の宿りし時の安樂の存するときと申さねばなりませ  
 ん、そして其の安心の智慧もて探り取るべきかと申せば、智  
 恵ばかりで取れませせん、何物でも買ふとの出來る金錢も  
 て買ひ取るとが出來るか、と申せば、金錢ばかりで取れませ  
 せん、何となれば、安んずる心は富者や學者の家に棲むばかりで  
 なく、雨を僅に凌ぐ貧者の家の宿りませす、安んずる心の本  
 心よ責なきと、義務を盡し、行くべき道を、守るべき法を  
 し、盡すべきもの、従ふべき來るべきもの、刑擄の古聖ソク  
 守りて、良心の従ふべき來るべきもの、刑擄の古聖ソク  
 ヲテ、それが讒害よよりて毒殺せらるべきとき、刑擄の古聖ソク  
 従容自如たるを見て驚きませす、然し此の従容自如たるは、左  
 もあるべきと信じませす、刑よ臨むとき、プラトールが遺言を



求めしよ、あ、未だ彼婦より買し鶏一羽の代を拂ひざりし、  
 汝我が爲めよ之れを拂へしと申したと申すと見ましても  
 ソクラテスが死に至るまで義務本分を盡して恨む處あら  
 ざりしを思ふでムりまする、之れでこそ安心が宿たので  
 す、キリストが十字架に釘けられし時、吾が事畢れり、父よ、吾  
 が魂を托すと申しました、杯の實に羨むべきことでのありま  
 せん乎、爲すべきことを爲し、畢りた時の實に安心です、この例  
 よもありませんが、私達でも今日一日は爲さねばならぬ仕  
 事をさし畢りしとき、の安心です、若しも畢りませんならば  
 氣は懸ります、學生の時、の試験前、實は苦勞します、が目出  
 度、濟みました、曉の氣持が安かでのムりません、か家の普請  
 の濟みました時、道路修繕の整ふたとき、杯は賀杯を擧ぐる  
 は皆安心の標です、一生の事業修行も全様よて盡すべきこと

を盡し畢れば死後に恨みありません、私の思ひますに我々  
 小人間が到底爲すべき本分を爲し畢るなどの大事の出来  
 得べしとの信せられませんが、常々心其道に居らば、矢張り  
 安心のものであらうと存じます、  
 春の野に出で、若菜揃む、幼児の愉快氣ある、其の心の圓  
 満無邪氣なるよ由るとです、花の下よ面白く歌ひつ廻る娘  
 子も、心よ雲のあらねばこそ樂いのです、秋の夕に月を見て  
 心慰め氣を露らす、あど、の心に責めある人のあすべきとで  
 のありません、花下よ美酒あり、月坐よ佳味ありとも、安心休  
 より見れば、樂となりましようが、不安心体より見るときの  
 花笑のす、月歌のす、花の下よ仇敵伏し、月の坐よ刃光る散葉  
 に追手隠れ、庭の竹よ盜賊窺ふ、左れば平の清盛の福原殿よ  
 月を見んとて、白骨を眺め、足利時氏の鎌倉宮中よ幽霊を見



由井正雪は己が寢室に死人に逢へり、斯る例の數あるとよ  
 て心よ責むるとあれば安心の少しもムりません、不義を以  
 て人を殺した怨を以て人を欺き、利を以て人を陥れた詐を  
 以て人を責めた情よ迷ふて不正をおした、不徳を以て金を  
 奪たと云ふが如き雑多の不正が心にあれば心の絶へず思  
 ひ出でい苦痛を興るでムります、斯る人の富めばとて貴け  
 ればとて安心常にあるさく、心卑劣にして思ひしよりの瀕  
 弱あるものです、  
 昨年岐阜愛智の大震災にの私も餘波を受け一人ですか  
 ら惨烈あるの存じて居りますが、巨智部博士を始め學者達  
 が地震に就て地質やら震動やら、氣壓やら、原因やら建築や  
 ら、中よの動物と地震あどを調査する人がありましたが、私  
 の地震と人間の關係を心理的よ考へました、地震の勢力の

非常なものです、見るべき世界にの家を潰し、倉を破り、地を  
 裂き、人を殺す位の事ですけれども、見るべからざる精神世  
 界の變動と申すものが中々大變です、地震の腦隨に感ずる  
 との地震器に感ずるよりも鋭敏です、一毎に人の心の濁  
 りが清みました、舊昔よりの悪事の懺悔が腦よ充ちて居り  
 ます、神もさを懺悔を聞くよ多忙でムりましたよう、斯くして  
 五震十震万人の心は正義に皈り、良心の光が照しましたか  
 ら、傲慢家も俄かよ謙遜家とあり、強慾家も忽ち慈善心を起  
 し、淫風地を拂て去られ、盜賊も懺悔したでムりましたよう、地  
 震の腦に通ずるや、心の改築せらるとの實に不思議です、又  
 私の旅中よあつて奇現象を目撃しました、黒雲幕々天を蔽  
 ふと思ふまよ、電光劍の如く霹靂轟然天を破り、彼方の森よ  
 落ちました、暴雨地を穿て降り電光尖鋭眼を裂き、陸々轟々



見る間に見る間に落雷窓を破つて来る、旅館の主人を始め  
 旅客一同皆色を失ひました、而して香昇る處は懺悔が始り  
 ました、また之も地震と一般一光一鳴罪洗のれ善心が起り  
 ます、人の罪深きは至て見るべきとです、常は分を守り安  
 心の世界に於て生活する人の少くなく、ムります、其の地震  
 雷の時悔改めた心もて平生分を守り、義務を盡して居りま  
 した、なら人の幸あるもので、す、悪をかし不正を爲し、つ、幸  
 福と安樂を求むるの、木は緑て魚を求むるより、至難です、  
 眞正宗教の徳よ由て心の霧を打ち拂ひ、良心の光を輝かし  
 義務を守り、本分を盡さねば、か、りません、  
 附言、此篇を讀んで宗教の必要を感じせられし方の片紙  
 もて予は全感を告げ玉ひ、病間の慰め之れに増すもの  
 あらざるべし、

予の個人篇と社會篇とを合せて宗教要論となし、第一卷と  
 なさんと希望せし、社會篇は聊か考証する處あり、議論も  
 少しく加ふる精神あれば、論據自ら異なるを以て別巻とな  
 し、個人篇の勉めて平易の事情のみを陳べたり、又た著者  
 の老嫗心の最廉價を以て購讀者を益せんことを計りたり、  
 社會篇の予の滿胸の不平を泄らすべき處なれば思想にも  
 筆端も力を用ゆべきの當然隠伏せる悪魔の衣を發き、横  
 行せる奸邪の魂を斬るも此篇にあるべし、今豫想せる綱目  
 を擧ぐれば左の如し、

第二章	社會篇
第一段	眞正明白愛國之精神
第二段	法律の世を救ふに足らず
第三段	教育の無精神



第四段	富貴公子の嬌慢
第五段	陰險陽和偽徳偽善
第六段	人を殺して自立す平親王
第七段	醜猥四聞日光徹
第八段	大功不顯小才傲
第九段	社會制裁論
第十段	宗教感化論
第一節	宗教一統の勢力
第二節	宗教審判説
第三節	宗教制裁説
第四節	道義鼓舞論
第二編の基督敎活論とす、蓋し井上圓了氏の佛敎活論より對して名づくるものあり、然れども予の井上氏の如き哲學的	

の難義を取らず、實験を基礎として、論証せんと欲す、細目未だ明ならざれども、一應の他宗を論難し進んで基督敎の學説を序し教義を平穩に陳すべし、  
 第三編の基督敎難解論とす、世の基督敎非難に關し答辯すべし、又た解説を試むべし、  
 第四編の基督敎教會論として、専ら予の難論と希望を陳ぶる精神あり、



明治二十五年十二月廿六日印刷  
明治二十五年十二月廿八日出版

著者 平岡希久

靜岡縣興津町三十六番地寄留

發行者 福永文之助

東京々橋區出雲町一番地

印刷者 矢部次郎

大阪西區新町通四丁目百六番屋敷

發行所 警醒社書店

東京々橋區出雲町一番地

賣捌所 福音社

大阪土佐堀三丁目三十八番屋敷



德意志帝國皇帝威廉第二  
德意志帝國皇儲奧古斯特維克多爾

德意志帝國皇帝威廉第二  
德意志帝國皇儲奧古斯特維克多爾  
德意志帝國皇帝威廉第二  
德意志帝國皇儲奧古斯特維克多爾  
德意志帝國皇帝威廉第二  
德意志帝國皇儲奧古斯特維克多爾  
德意志帝國皇帝威廉第二  
德意志帝國皇儲奧古斯特維克多爾  
德意志帝國皇帝威廉第二  
德意志帝國皇儲奧古斯特維克多爾



